

事業内容：防災に関する指導方法等の開発・普及等のための支援事業
学校防災アドバイザー活用事業の実施

題名：実践的防災教育総合支援事業（命の大切さを考える防災教育公開事業）
 （地震・津波からの避難）

—自らの命を守る防災教育—

～的確に判断し、主体的に行動できる児童の育成をめざして～

所属・電話番号：長生村立一松小学校・0475-32-1102

校長 鈴木 輝夫

1 実施事業

- (1) 防災に関する指導方法等の開発・普及等のための支援事業の実施
 (2) 学校防災アドバイザー活用事業の実施

2 事業概要

- (1) 防災に関する授業や学校における防災活動の公開
 (2) 災害発生時の学校と地域住民の行動や役割の検討及び活動の実施
 (3) 学校・地域住民参加による地域懇談会や合同防災訓練の実施
 (4) 保護者・地域住民・教職員等の参加による講演会の実施

3 実施概要

実施時期	計画事項	参加者
4月	○避難訓練 (津波・ライフジャケット)	児童
5月	○避難訓練(合同) ○引き渡し訓練 ○担当者連絡会議	園児・児童 児童・保護者 担当者
6月	○防災体験教室 ○避難訓練(下校) ○ワンポイント避難訓練(休憩) ○授業展開(学級活動) ○避難訓練(下校)・引き渡し訓	児童・保護者・職員 児童 児童 2、4年 児童・保護

	練・防災集会I	者
7月	○校内研修会 ○避難訓練(緊急地震速報)	学校防災アドバイザー 児童
9月	○防災地域懇談会 ○避難訓練(地震・火災)	保護者・地域・教員 児童
10月	○授業展開(学級活動) ○担当者連絡会議 ○授業展開(学級活動) ○地域合同避難訓練・防災集会II	1、5年 担当者 ときわ学級 児童・保護者・地域住
11月	○防災教育公開	民・学校職員・村職員
1月	○担当者連絡会議	学校・地域・保護者 担当者

4 担当者連絡会議

	氏名	所属及び役職
1	山本 良雄	東上総教育事務所指導主事
2	古山 誠	長生村教育委員会学校教育課長
3	佐瀬 圭一	長生村教育委員会学校教育課係長
4	芝崎 和弘	長生村総務課長
5	吉野 弘員	昭和自主防災会代表
6	一藁 雅美	一松地区自治会長会長
7	石井 英樹	一松小学校PTA会長
8	鈴木 輝夫	一松小学校校長
9	植草 佳代子	一松小学校教頭
10	丸 英一郎	一松小学校安全主任
11	齋藤 幸子	一松小学校防災教育担当

5 具体的な取り組み

(1) 防災活動

① 避難訓練（抜粋）

ア 津波想定（ライフジャケット着用）



村から配布されたライフジャケットの着用を取り入れた避難訓練を行った。1年生の補助を6年生が行う姿が見られた。また、反省を生かし、学年の配置や移動列（2列から4列へ）を変更し、より速く避難できるようにしてきた。

イ 保育所との合同避難訓練



保育所の園児とともに屋上へ避難した。引き渡しのために、一緒に多目的室へ移動する訓練も行った。

ウ 下校時避難訓練・引き渡し訓練



集団下校中に地震が発生、大津波警報が発令されたと想定し、初期行動及

び屋上への避難を行った。初期行動では、班長を中心に通学路での安全な場所や身を守る方法を考えさせ、ランドセルを使って頭を守ることを理解させた。次に、大津波警報発令の合図で屋上へ避難し、解除の合図で保護者への引き渡しを開始した。避難訓練から引き渡し訓練へと一連の流れを実施したので、

保護者と教員の動きの確認にもなり有効であった。



エ ワンポイント避難訓練（緊急地震速報の活用）

緊急地震速報により、初期行動をとり、その後、大津波警報発令放送で、各自、屋上へ避難する。（教師による指示なし）

高学年が低学年に避難の仕方について教える場面が多く見られた。ほとんどの児童が、これまでの訓練の積み重ねにより、指示なしに屋上に避難することができた。一人では、どう行動すればよいか戸惑う児童も見られた。ここでの反省点を授業実践に生かした。



② 体験学習

ア 起震車・煙体験



災害発生時に正しい対処行動をとることができるようにするため、全校児童、職員、保護者（希望者）が、起震車と煙体験を行った。地震や煙の怖さを体感するとともに、普段の避難訓練を真剣に行うことが大切だという感想が多く聞かれた。

イ 着衣泳

まず、着衣泳により、水の中での動きにくさを体験させた。次に、ビート板などを使って浮く練習をした。さらに、服の上からライフジャケットを着用して水の中に入り、浮きやすさの違いを体感させた。

低学年の児童は、浮くことに十分慣れていないため、抵抗のある児童が多かった。4・5・6年生は、自力で背浮きができるようになり、長く浮遊していただけるようになった。浮遊しながらライフジャケットに付いているホイッスルを吹き、救助を求める練習も行った。



③ 防災集会 I

～災害を知り、命を守る～

運営委員会からのメッセージ

一松は、とても自然が豊かです。すぐ近くには、一松海岸があります。しかし、もし、大地震がきたら、大きな津波も来るかもしれません。自然災害はなくすことはできません。でも、避難訓練をしたり、みんなで考え行動したりすることで、災害の被害を少なくすることはできると思います。この集会では、津波について知り、避難訓練がなぜ必要かを考えるきっかけにしたいと思います。

【内容】

○ DVD 鑑賞

○ 「津波について調べよう」4 年発表



○ ライフジャケット着用訓練



東日本大震災の DVD を鑑賞したり、元禄津波についての発表（4 年生）を聞いたりした。全校児童が参加し、多くの保護者が参観することで、地震・津波に対する意識の共有化を図ることができた。保護者から「これから、家庭での避難について、家族で相談していきたい。」という感想が聞かれた。

(2) 授業実践（学級活動）

① 第2学年

「下校途中での避難のしかた」

「下校途中、自分一人だったら…」という課題を設定し、児童の主体的な学びを引き出した。下校コース別に話し合わせ、その後、擬似体験を行ったことで、話し合い活動が実践へと生かされた。



② 第4学年

「休み時間に大地震が起きたら」

校庭や階段等の危険やその場所での避難の仕方をグループ毎に調べ発表させた。大地震発生時には、自分で考え、状況に応じた適切で安全な避難行動を起こすことの大切さに気付くことができた。



④ 第5学年

「緊急時のすばやい対応のしかた」

消防署員、防災士をゲストティーチャーに招き、心肺蘇生法について学んだ。胸骨圧迫について、一人一人が体験することで、アンケートでは心肺蘇生法を行うことに不安を感じていた児童も人命救助に対する気持ちを高めることができた。



⑤ ときわ学級

「廊下、階段（昇降口）での避難のしかた」

実際に、廊下や階段に行き行って初期行動をとったことにより、危険なものから離れた方がよいことを理解して、頭を守ってしゃがむことができた。

③ 第1学年

「教室以外での初期行動のとりかた」

話し合いをもとに初期行動を教師が師範した後、児童が実践したことで、より具体的に身をもって適切な初期行動の仕方を理解することができた。今回の授業を行ったことにより、誤った初期行動をとっていた児童が正しく行動できるようになった。



(3) 地域との連携

① 地域防災懇談会

ア 日時 平成26年7月18日(金)

18:00～20:30

イ 場所 一松小学校体育館

ウ 対象 地域住民・保護者・教職員

エ 内容

(ア) 講演

演題：「地震・津波から命を守るために」

～学校で、家庭で、地域で～

講師：いすみ市役所危機管理監

内田 豪 氏

「地震災害時には、まず、『自助』『共助』が命を救う。避難場所や避難経路を家族で話し合うこと。地域や身近にいる人同士が互いに助け合う自主防災組織が重要。」という話から、自助・共助の大切さを再認識することができた。また、データに基づき、大地震が起こった場合の長生村の被害、津波避難への提言が出された。



(イ) 懇談

参加した地域住民や保護者から意見や質問が話題として出された。

「一人では避難できないお年寄り」「一時避難所(築山)ができることで、安心してしまう」「保護者の危機意識に差がある」等が心配である。それには、話し合う場を多く設けることが大切であろう。自主防災組織など地域が主体となってリーダーを育成していきたい。危機意識を持てるようにしたい。

② 地域合同避難訓練・防災集会

ア 日時 平成26年10月18日(土)

9:00～12:10

イ 対象 児童・地域住民・保護者・教職員

ウ 合同避難訓練(全校児童で参加)

訓練の流れ

- 地域住民と共に避難訓練を行う。
- 保護者への引き渡し訓練を行う。
- 保護者と共に避難所体験をする。

多くの地域住民が避難訓練に参加し、屋上へ避難した。屋上で、本校職員か



ら東日本大震災の被災体験談を聞いた。



自宅(福島県浪江町)へ行く時には、今でも防護服を着なければいけません。

大津波警報解除の放送の後、多目的室で保護者への引き渡し訓練を行った。その後、児童は、保護者と一緒に体育館で避難所体験をした。避難者カードの記入、応急給食の試食を行った。



エ 防災集会Ⅱ

～みんなに伝えよう！～

児童が今までに避難訓練や体験学習、授業で学習したことを地域・保護者に向け、発表した。避難所に来ていた多くの地域住民に、学校の取組や児童の様子を知らせることができた。

(4) 公開研究会

① 授業実践

ア 2年「家に一人でいるときの避難」

自宅に一人でいる時の避難の仕方について、話し合い、擬似体験を行うことにより、理解を深めることができた。

イ 3年「いろいろな場所での避難の仕方」

経験した避難訓練をもとに、様々な場所での初期行動について調べ、発表会を行った。避難について理解を深めた。

ウ 4年「いざというときの備え」

防災リュックに「何を入れるか」だけでなく「なぜ必要なのか」、「背負って走れるか」を考えた。実際にリュックに入れ、ゲストティーチャーとして村総務課職員にアドバイスをもらった。

エ 6年『もしも…』の時の判断と行動

災害発生時は、様々な状況下で判断し行動していかなければならない。クロスロードゲームを通して、互いの意見を伝え合い、災害に対する考えを深めた。

② 記念講演

「震災体験と自主防災活動
～ 3.11 大震災の教訓～」

災害伝承 10年プロジェクト語り部

田村 剛一 氏

山田町（岩手県）

愛宕地区自主防災会会長としての経験



(5) 学校防災アドバイザーの活用

① 保育所との合同避難訓練

避難訓練の参観、指導

② 校内研修会

一松小の対策と課題について

③ 校内授業研究会

防災士として児童への指導

授業についての指導・講評

④ 公開研究会

防災事業全般についての評価

- アドバイザーの活用により「子ども自らが自然災害の恐ろしさを知り、自分の命は自分で守ることを学ぶことが大切。この事業を通し、いざという時のための引き出しをたくさん持つことが必要。」について理解を深めた。

6 成果と今後の課題

(1) 成果

- 様々な防災活動を体験することにより、児童の防災意識が高まり、「自分の命は自分で守る」という態度が随所で見られるようになった。
- 授業実践（学級活動）を行う中で「自らの命を守る防災教育」について考え、大地震発生時には、状況に応じた適切で安全な避難行動を起こすことの大切さを理解することができ、主体的に行動できる児童の姿を見ることができた。また、こうした実践を通して、自助・共助の気持ちも育てることができた。

- 保護者や地域住民へ地域合同避難訓練、引き渡し訓練に積極的な参加をよびかけることで、学校が防災に対してどのように取り組んでいるかを知らせる良い機会となった。同日に行った防災集会では、学んだことを発表したり、県内の津波被害のDVDを視聴したりすることにより、児童だけでなく、保護者や地域住民の防災意識をさらに高めることができたと考えられる。

(2) 課題

- 「自らの命を守る」というテーマのもと実践してきたが、災害は、いどこで発生するか分からない。判断力と行動力をしっかり児童に身につけられるよう防災教育を継続していきたい。